

水と生物多様性：持続可能な開発への妙薬？

吉中厚裕 国連生物多様性条約事務局

要 旨

1. 地球サミットからリオ+20へ

1992年、リオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）で、12歳の少女セヴァン・スズキさんが、各国首脳の前に「世界を5分間黙らせた」演説を行った。

「絶滅した動物をどうやって生きかえらせるのか、あなたは知らないでしょう（中略）どうやって直すのかわからないものを、こわしつづけるのはもうやめてください。」

地球サミットの結果「リオ3条約」が誕生した。その一つが生物多様性条約である。

そして20年後の昨年、国連持続可能な開発会議（リオ+20）が開催された。我々は20年前に約束したことを果たしてきたのであろうか。セヴァン・スズキさんが再度演説を行っている。

「今や、問題はさらに深刻なものになっています。かつてよりずっと急を要する身近な問題になっているのです（中略）この世界の経済、社会、そして環境はそれぞれ密接にかかわりあっており、解決のためには包括的なアプローチが必要になっています。」

「水」に関しては、それが「持続可能な開発の中核をなす」（「我々の求める未来」パラグラフ119）ことが認識されるとともに、その量と質とを維持していく上で「生態系が果たす主要な役割」が認識され、「生態系を保護するとともに持続的に管理するための活動を、各国の国境を尊重しながら、支援する」（同パラグラフ122）ことが合意された。

2. 生物多様性戦略計画：2011-2020

2010年に愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）において「生物多様性のための戦略計画（2011-2020）及び愛知目標」が採択された。本戦略計画は「2050年までに、生物多様性が評価され、保全され、回復され、そして賢明に利用され、それによって生態系サービスが保持され、健全な地球が維持され、全ての人々に不

可欠な恩恵が与えられる」ことを長期目標（ビジョン）とし、短期目標（ミッション）は「生物多様性の損失を止めるために効果的かつ緊急な行動を実施する。これは、2020年までに、回復力があり、また必要なサービスを引き続き提供できる生態系が確保されるためである。それによって地球の生命の多様性が確保され、人類の福利と貧困撲滅に貢献する」とされた。そしてこのビジョンとミッションとの達成のために、5つの戦略目標の下、計20の愛知目標が採択された。

COP11（2012年、インド・ハイデラバード）では、これら20の愛知目標の達成のために、「水」が重要な役割を果たしていることがあらためて確認されたところである。

3. 水と生物多様性

現在、ミレニアム開発目標の目標年である2015年以降の枠組み、「持続可能な開発目標」についての議論が始まっている。

「水」は「持続可能な開発の中核」をなしており、水安全保障の観点からも、既に国際的、政治的、経済的に重要なトピックとなっている。しかし、その「水」の維持のために生物多様性・生態系が果たしている役割についてはどこまで広く認識され、実際の行動に結びついていると言えるだろうか。

生物多様性は開発に対する「障害」や「被害者」なのだという従来の考え方から、我々が本当に求めている未来を実現するための重要な「ツール」もしくは「解決策」なのだという考え方へ、視点の大きな転換が求められているのではないかと。

そして、地球レベル・地域レベルでの「水」の循環、そして「水」に関わる「生態系サービス」に非常に重要な役割を果たしている「湿地」は、その転換を促すための大きな「湿原力」を今こそ発揮できるのではないだろうか。